

君がそんな話をしていたから祭りに誘った。
君は人混みが苦手だけれど、賑やかなことは決して嫌いではない。浴衣で行こうよ、と伝え、私も新しい浴衣を買っておこうかな、とも伝えた。女二人の浴衣デート。もちろん恋人ではないし、私にとっての君も君にとっての私も恋愛対象ではない。日本語は自由で不自由だと思う。こういう関係にちょうどいい言葉が見当たらない。「親友」では堅苦しすぎる。

夕方に祭りは始まり、まだ空は昼の名残。じわじわとにじむ汗は新品の浴衣に染み込んでいく。

君は見慣れた紺色の朝顔柄の浴衣で、あつつ、と顔をゆがめる。不快さが心地よい、そういう遠い夏を思い出す。

「彼とね、別れたんだ」

「知ってた」

「そっちもでしょ」

「知られてたか」

「当たり前」

「だよねえ」

焼き鳥を何本か買い、ビールも買う。お互い悪い大人になった。

「このままさ」

何も変わらなければいいのに、と君が言う。

「でもさ」

結局変わってきちゃったよ、と私が言う。
子供だった私たちは少女になり、大人になり、歳を重ねて老けてゆく。私たちは何も変わらなくても周りは変わってしまうし、だったら私たちも変わってしまった方が楽なのだ。私が思いつくそんなことは、君はとっくに承知している。

「夏が終わるね」

「暑いのはまだ続くね」

「困ったねえ」

「ほんと困る」

ゴミ箱を探して食べ終えた焼き鳥の串とビールのカップを捨てた。人混みをかき分けて帰路につく。金魚すくいの屋台が目に残る。

「やだよ、死んじゃうもん」

私が何も言わなくても君はそう言って先へと進む。そう、いつだって先を歩くのは君だ。だから会場アナウンスが迷子のお知らせを伝えている。日が沈んでから花火も上がるようで、会場に人は増えていく。

流れに逆らって帰る。私たちは、帰る。

了



魚くらい泳いでいないとやっつてられない。

なにしろ毎日暑いのだ。

びちと溢れだす。

お風呂の中にもいるし、シャワーを流せばびち

中になんかいる。

もちろん徳利の中にもいるし、ワインボトルの

お猪口の中に。

ワイングラスの中に。

タライの中に。

金魚鉢の中に。

水があればどこにでも魚はいる。



氷砂糖

二匹の魚



お読みいただきありがとうございます。よろしければ二次元コードより、感想アンケートにご協力ください。

二匹の魚

発行

2025.08.14

氷砂糖

@ice03g.bsksky.social